



Title	「母北の方なむ」の「係り結び」はどうなっているのか：『源氏物語』桐壺の巻の授業
Author(s)	菅原，利晃
Citation	札幌国語研究，18：55-63
Issue Date	2013
URL	http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/7590
Rights	

「母北の方なむ」の「係り結び」はどうなっているのか

— 『源氏物語』 桐壺の巻の授業 —

菅 原 利 晃

はじめに

『源氏物語』の桐壺の巻、特に冒頭部分は、高等学校の教科書、特に「古典」に多く採られている、「定番教材」である。

しかし、『源氏物語』の読解は、生徒にとって相当やっかいなものである。特に古語や文法に関する理解力が相当に必要なものであり、生徒は辞書を引いたり、品詞を確認したりしながら、文脈をたどるとどしく追いかけて、悪戦苦闘のすえにやっこのことで読み進めるといった具合である。その際に、主語の省略を考え、敬語をおさえつつ、「女御」「更衣」といった語も含めて宮中に関する古典的背景も理解しなければならぬ。したがって、自然と教師側の説明が多くなり、一人ひとりの生徒の読解の過程はどのようなものであるのか、どれくらい文章を読み取ることができたかを教師側が把握することが至極困難なものとなってしまふ。時には、生徒の間違った読みも一つ一つ取り上げて確認させなければならぬのだが、なかなかそこまで

の学習指導までできていない。それだけ、『源氏物語』の文章は生徒にとって読解が困難なものであり、また教師側にとって生徒の読解の過程も把握しにくいものである。

そのような、生徒の間違った読みや、困難な読み取りについて、教師側は謙虚に受けとめなければならぬ。そして、そのような読みを生じさせる原因と、それへの対策としてどう指導すべきか、どう助言すべきか、を考えなければならぬ。本稿は、そのような反省に基づき、高等学校二年生の『源氏物語』の授業の一報告である。

—

まず、教科書の本文を掲げておく。実際に授業で使用した教科書は、明治書院『新精選古典』である（底本は『新編日本古典文学全集』二〇。傍線は引用者が付したものである。以下同じ）。

いづれの御時にか、女御・更衣あまた候ひ給ひける中に、いとやむごとなききはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。初めより我はと思ひあがり給へる御方々、めざましきものにおとしめそねみ給ふ。同じほど、それより下臈の更衣たちはましてやすからず。(中略)

父の大納言は亡くなりて、母北の方なむ、いにしへの人のよしあるにて、親うち具し、さしあたりて世のおぼえはなやかなる御方々にもいたう劣らず、何事の儀式をもてなし給ひけれど、とりたててはかばかり後見しなければ、事あるときは、なほよりどころなく心細げなり。

前の世にも御契りや深かりけむ、世になく清らなる玉の男皇子さへ生まれ給ひぬ。いつしかと心もとながらせ給ひて、急ぎ参らせて御覧するに、珍かなる児の御かたちなり。一の皇子は右大臣の女御の御腹にて、寄せ重く、疑ひなきまうけの君と、世にもてかしづき聞こゆれど、この御にほひには並び給ふべくもあらざりければ、おほかたのやむごとなき御思ひにて、この君をば、私物に思ほしかしづき給ふこと限りなし。

生徒の読解が困難なのは、特に、「父の大納言は亡くなりて、母北の方なむ、いにしへの人のよしあるにて、親うち具し、さしあたりて世のおぼえはなやかなる御方々にもいたう劣らず、何事の儀式をもてなし給ひけれど、とりたててはかばかり後見しなければ、事あるときは、なほよりどころなく心細げな

り。」の一文である。ここの文脈の理解が難しいと言う。というのは、ここの部分の「係り結び」の流れが理解できない生徒が多いのである。

この「なむ」の結びについては、次のような考えが見られた。

- ① 連体形にはなっていないが、(なぜか)「心細げなり。」に係る。
- ② 「いにしへの人のよしあるにて、」に係るが、流れている。
- ③ 「いたう劣らず、」に係るが、流れている。
- ④ 「もてなし給ひけれど、」に係るが、流れている。
- ⑤ わからない。

授業中の生徒の反応は、なぜ連体形ではないかの理由がわからず不審ながらも、①の考えの生徒がおよそ半数を占める。⑤も多くを占め、残りの②④がそれぞれ少数といった具合である。

①は、「係り結び」だから、すべて文末に結びの語がある、という誤解、凝り固まった既成概念もあって、つい文末を見てしまうが、文末は「心細げなり。」となっていて、「なむ」の結びの形である連体形にはなっていないというものであり、そこでさらに生徒はわからないと言う。結局、はじめからわからない場合も含めて、⑤が多くを占めることになるのである。

「係り結び」について、生徒は、「ぞ」「なむ」「や」「か」は連体形で結び、「こそ」は已然形で結ぶという、公式しか頭にはない。

そもそも、係助詞は「係り受け」ということが大事なのであって、必ず文末に「係り結び」の結びの語があるということだけでは

つまり、文脈の理解とともに「係り結び」を考えなければならぬのである。

ところで、「係り結び」について、豊永徳は次のように述べている(注1)。

文法学習における「係り結びの法則」の指導は、これを文節間の関係の中に位置づけ、文構造を説明する一つの方法として扱った方が、「それを受ける文末の活用語」すなわち「結び」が明確に把握できる。(中略)「係り結びの法則」の指導は、まず、文節間の関係の中に位置づけて、「結び」を明確に把握させることである。ついで、「係り結び」の表現に認められた作者の心情や表現意図を汲むことへと進むべきであろう。

また、黒沢勉は、『徒然草』の「花は盛りに」(第一三七段)の学習指導の例をあげて、次のように述べている(注2)。

これ迄係り結びと言えば、結びの活用形にのみ着目しがちであったと思われる。しかしそれでは文の構造、文章の流れは見えてこないのではあるまいか。係助詞を含む文節がどの文節にかかっていくのか、そしてそれは、どのような関係になつていくのか、さらには前の文とどのようにつながつていくのか、というような視点から「は・も」を含めて、「ぞ・なん・こそ」を吟味してみることによつて、本文を筋道だてて理解することができるはずである。

つまり、係助詞を含む文節がどの文節にかかっていくのかを構造的に読み取らせること、「係り受け」を考えさせるということが必要なのであって、文末の語形にのみとられすぎないようにさせるべきなのである。

従つて、授業では、当該文において、生徒が「なむ」という係助詞だけにこだわるということに注意を与えなければならぬ。「なむ」だけを考えるのではなく、「母北の方なむ」という文節をとらえる必要があるということである。

「(母)北の方なむ」という文節がどうつながつていくのかを、つまりは「係り受け」ということを生徒には考えさせなければならぬのである。それはまた、「母北の方」が、どうなったのか、という単純明快な問いを考えさせるということでもある。いわば、「近視眼」「微視」的ではない、「巨視」的な読みの姿勢が必要だということなのである。

ここで、『源氏物語』桐壺の巻の当該文、「父の大納言は亡くなりて、母北の方なむ、いにしへの人のよしあるにて、親うち具し、さしあたりて世のおぼえはなやかなる御方々にもいたう劣らず、何事の儀式をもてなし給ひけれど、とりたててはかばかしき後見しなければ、事あるときは、なほよりどころなく心細げなり。」について、管見によるものだが、比較的広く流布する諸書の説明するところをあげてみる。

まず、『日本古典文学大系』一四では、「もてなし給ひけれど」に「北方が」、「なほ抛り所なく心細げなり。」に「桐更は」と、校注者による主語の傍注がそれぞれあり、「係り受け」がわかりやすく示されている。「母北の方なむ」の頭注にも「この句は、『もてなし給ひけれど』にかかる。」とはっきり「係り受け」が示されている(注3)。なお、『新日本古典文学大系』ではこれらの注記はなくなっている。

『岩波文庫』も『日本古典文学大系』と同じ校注者のためか、それと同様に、「なほ、より所なく、心細げなり。」に「桐更は」という傍注があるが、「もてなし給ひけれど」には主語の傍注はない(注4)。

『新編日本古典文学全集』二〇では、「いにしへの人のよしあるにて」の頭注に、「いにしへの人のよしあるにて』は、『何ごとのたまひけれど』に続く。中間の『親うち具し…劣らず』は挿入句的な文脈。」とあり、これも「母北の方」の動作・行

為がどこに続くかをわかりやすく示している(注5)。

また、『源氏物語』の口語訳は、明治以降今に至るまで多くの方々が試みているが、ここで比較的「係り受け」がわかりやすいと思われる、橋本治『壺菱源氏物語』をあげておく(注6)。

女の父は大納言で、そしてその男は、一生を大納言のまま
で終えていた。女に既に父はなく、後家である故大納言の北
の方がただ一人、その更衣たる女の実家を支えてはいた。

女の母たるその北の方は、その先は宮家にも続こうという
古い由緒ある家の出の女であった。その誇りがそうさせたの
かもしれない。後家なる母北の方は、気丈にも女手一つで、
双親備わって今の世に声名を馳せる女達にも劣らぬよう、娘
更衣の支度万端を取り仕切った。

しかし女手一つの他に、はかばかしい後見のあることでは
ない。しかるべき朝廷の儀式の折々には、どう贅を尽くしど
う足掻いてみても、働きのある男を後見に持つ女達の輝きには
一歩を譲るしかなかった。その結果片親のうら寂しさを隠
すことが出来なかつた更衣は、しかしそれ故に更なる帝の寵
を得るようにもなつた。

橋本治なりの、原文からやや離れた解釈・補足説明が多く含まれてはいるが、実際の授業では、このような『源氏物語』の口語訳をプリントして生徒に配布し、原文の理解を深めさせることも一つの有効な方法であろう。特に、当該文の「係り受け」

などを生徒が理解するには恰好の補助教材となる。

ところで、「(とりたててはかばかし後見しなければ) 事あるときは、なほよりどころなく心細げなり。」の主語として、諸書では、

(ア) 「心細げなり。」までの主語を「桐壺の更衣」とするもの。

(イ) 「心細げなり。」までの主語をはっきりとは示していないもの。

の二つの場合があるようである。

(ア) の例はすでに引用したので多くを割愛するが、ちなみに、与謝野晶子訳『源氏物語』(一九一二年以降、当該本は何種もあるが、ここでは『与謝野晶子訳源氏物語全五十四帖』河出書房新社、一九八八年一月を用いる) では、「それでも大官の後援者をもたぬ更衣は、何かの場合にいつも心細い思いをすようだった。」と「桐壺の更衣」を主語としている。

また、(イ) としては、池田龜鑑校註『源氏物語一』(『日本古典全書』、朝日新聞社、一九四六年二月)、石田穰二・清水好子校注『源氏物語一』(『新潮日本古典集成』第一回、新潮社、一九七六年六月)、柳井滋・室伏信助・大朝雄二・鈴木日出男・藤井貞和・今西祐一郎校注『源氏物語一』(『新日本古典文学大系』一九、岩波書店、一九九三年一月) がある。なお、谷崎潤一郎訳『源氏物語』(旧訳一九三九年以降、新訳一九五一年以降、

新々訳一九六四年以降など、これも当該本は何種もあるが、ここでは新々訳「潤一郎訳源氏物語」巻一、中央公論社、一九七九年一〇月を用いる) では、「娘もそれに負けないようにと、どのような儀式の折にも気をつけて上げておられました。」と訳しているが、「心細げなり。」までの主語は示していない。

このような違いが見られるのは、「とりたててはかばかし後見しなければ、」の部分で、「桐壺の更衣」当人はもちろんのこと、「桐壺の更衣」の家族、すなわち「母北の方」をも示しているものであるという解釈によるものであろうと考える。また、ことさら「桐壺の更衣」と言わなくても当人であることがわかるからでもある。そのため「心細げなり。」の主語が「桐壺の更衣」とも「母北の方」ともとれ、あえて明確に主語をあらわさないような注釈も生まれたものと推察する。

例えば、玉上琢彌著『源氏物語評釈』第一卷(角川書店、一九六四年一〇月) では、「心ほそげなり」に『父の大納言……』から始まるこの長い一文の述語。他はすべてこの述語にかかる連用修飾語。」と注があり、「男がいたら、働き手があったらの嘆きは、今も昔も未亡人には付きものである。」と解説がある(注7)。一見、「心ほそげなり。」までの主語を「母北の方」とするように見受けられるがそうではなく、これは文の構造(述語)を指摘しただけのものであり、「心ほそげなり。」の主語は明示していないもの、すなわち(イ) に属するものとらえた。

なお、実際の授業では、「心細げなり」の主語を「桐壺の更衣」

として位置づけて授業を行い、当該文の「係り受け」を生徒に理解させるように指導した。それに基づいて本稿も報告および論を進めている。「心細げなり」の主語について「母北の方」を示しているかもしれないという解釈は用いない。

その根拠としては、まず、「父の大納言は」では「父」とを、「母北の方なむ」以下では「母」のことを、そして、一文の最後の「事あるときは、なほよりどころなく心細げなり。」では娘である「桐壺の更衣」本人のことを、それぞれに書き表しているというふうな構造的にとらえることが文意を理解しやすく難がないことがある。

また、先に掲げた橋本治『窯変源氏物語』の当該箇所本文に、「その結果片親のうら寂しさを隠すことが出来なかつた更衣は、しかしそれ故に更なる帝の寵を得るようになつた。」と明示されていることもある。その直前では、「しかし女手一つの他に、」と「母北の方」のことを表し、「はかばかしい後見のあることではない。しかるべき朝廷の儀式の折々には、どう贅を尽くしどう足掻いてみても、働きのある男を後見を持つ女達の輝きには一歩を譲るしかなかった。」と「桐壺の更衣」のことを表している。つまり、「何事の儀式をもてなし給ひけれど」が「母北の方」のことを表していて、「とりたててはかばかしき後見しなければ、事あるときは、なほよりどころなく心細げなり。」は「桐壺の更衣」のことを表しているというものである。

これと同様に、近年刊行された、林望『謹訳源氏物語』一（祥

伝社、二〇一〇年三月）でも、「とはいつても、父のない身の上では、これに代わるしかるべき後ろ楯も持たなかつたので、とくに正式の行事などのときには、やはりどこかたよりなく心細げに見えた。」とあり、（ア）と同様の表現になっていることも理由の一つである。

さらには、「心細げなり」の主語を「桐壺の更衣」と明確に示すことで、「うら寂しさを隠すことが出来なかつた更衣」は、「どこかたよりなく心細げに見え」、それによってより一層の「帝の寵を得るようになつた」という橋本の解釈が生きることとなる。この解釈に従えば、実際の授業では生徒の共感も得られやすく、心情把握が可能となり、さらに心情理解をも深めさせることができるのである。

四

『源氏物語』桐壺の巻の当該文について、比較的広く流布する諸書の説明するところを見てきた。それによると、「心細げなり。」までの主語をはつきりとは示していないものもあつたが、「心細げなり。」までの主語を「桐壺の更衣」とすることが確認できた。

この確認の上で、実際に『源氏物語』桐壺の巻の授業で、生徒に読みをつまびきを生じさせることの多い「母北の方なむ」の部分はどう指導するかについて考えてみたい。

前述の通り、文章の内容もあまり考えずに、ただ機械的に「なむ」の結びは文末にある、という単純な考えだけではいけない。

実際の授業では、まず、「なむ」だけではなく、「なむ」を含む文節を考えさせる。ここでは、「桐壺の更衣」の母である「母北の方」に「なむ」がついており、主語は「母北の方」であることは生徒も容易に理解できるのだが、それさえにも気がつかない生徒が多いのである。

次に「母北の方」の行動・行為を考えさせる。

その際に、「係り受け」ということを考えさせなければならぬ。そうすると、「何事の儀式をもてなし給ひけれど」という述部が読み取れるはずである。そして、④のように、ここで接続助詞「ど」が用いられていることによって、結局、「係り結び」は成立せず、流れていることに気づかせなければならぬ。

この、述部についても、②のように、「いにしへの人のよしあるにて」が実は「いにしへの人のよしあるなる」の形からの流れである、という考えもある(注8)。これは、文意をとらえた考えであり、そう悪くはないが、この考えではその後の「何事の儀式をもてなし給ひけれど」の動作主がわからなくなってしまう、文脈が続かない。③「いたう劣らず」に係るが、流れている、という考えも同様である。

そこで、ヒントとして尊敬語「給ひ」について着目させると、ここまですべて「母北の方」の行為であり、この文の述部であることに生徒は気がつくようである。尊敬語「給ひ」という一語の手がかりだけで生徒には大きな発見があるようである。

また、生徒の間違える原因の一つが、「親うち具し、さしあ

たりて世のおぼえはなやかなる御方々にもいたう劣らず」の部分の意味上・構造上の働きである。この部分は、修飾の働きをもてなし給ひけれど」を修飾しているのである。生徒には、むしろ、「親うち具し、さしあたりて世のおぼえはなやかなる御方々にもいたう劣らず」の部分挿入句としてとらえさせ、括弧で囲ませるといった教師側からの指示を与えると、理解が早いようである。

さらに、「事あるときは、なほよりどころなく心細げなり。」の部分が、「母北の方」ではなく、「桐壺の更衣」のことについて述べていることに気がつかない生徒も多い。ここでは、後ろ盾のいないことや、心細い様子などから、だれのことについて述べた表現であるかを生徒に考えさせなければならぬ。また、前述の通り、「心細げなり」の主語を「桐壺の更衣」と明確に示すことで、「うら寂しさを隠すことが出来なかった更衣」が、「どこかたよりなく心細げに見え」、より一層の「帝の寵を得るようになつた」という解釈をさせる。

そうすれば、「なむ」の結びが、①のように、連体形にはなっていないが、「心細げなり」に係る、といった間違いは起きないはずである。文章の意味するところをしつかりと読むことによって、「係り結び」の流れが理解できるのである。

おわりに

以上が、『源氏物語』桐壺の巻の授業に関する報告である。

この授業を通して、生徒の文法に対する凝り固まった既成概念を振り払い、より深く文脈の理解へと導かねばならないことを感じさせられた。

また、生徒は、教師側が思っている以上に、想定外の読みをすることがある。むしろ、そのようなときの間違いこそが、生徒の読みの深化へとつなげることになるチャンスととらえてもいい。

その際に必要なことは、文脈・文意を正しく理解する力と、文法の理解力である。文法の理解なくして文意はとらえられないし、文意の理解なくして正しい文法の理解はなされない。昨今、古典文法嫌いの生徒が多く、それに沿った形での文法軽視の古典の授業が散見されるが、古典文法の正確な理解は、時に生徒の読みの深化につながるものでもある。もう一度、生徒の読みに従った古典文法の有効な活用について考える必要があるだろう。

また、そういった生徒の読解の過程において、つまづきが生じているという事態を、ともすれば教師側は看過しがちである。これは授業時における評価の在り方とも関連する事柄でもあるが、読みのつまづきをいかに見つけるかは教師側にとって必要な事柄であり、そこから授業の内容の修正や見直しをしなければならぬ。

それには、授業のたびに、生徒の読みに沿った効果的な発問や綿密な机間指導が必要であろうし、机間指導を通して一人ひとりの生徒との対話からつまづきを発見することが必要である

う。また、少人数のグループ学習による学び合いによって、自分たちでみずから読みのつまづきを見つける方策もあるだろう。あるいは、先に示した、橋本治の口語訳のようなものを補助教材としてプリントして生徒に配布し、原文の理解を深めさせることも一つの有効な方法であろう。

生徒の読解の過程におけるつまづきの発見をいかにすべきか、いかに授業の修正や見直しをすべきかに留意することは、教師側にとって必要な指導の在り方なのである。

注

- (1) 豊永徳「係り結びの法則」の指導」(『国語教育研究』二六中、一九八〇年一月)による。
- (2) 黒沢勉「内容の吟味に役立つ助詞・助動詞の学習指導」(『高等学校国語科新しい授業の工夫二〇選(第二集)古文・漢文編』大修館書店、一九八九年四月)による。
- (3) 山岸徳平校注『源氏物語一』(『日本古典文学大系』一四、岩波書店、一九五八年一月)による。なお、本稿では、特に、『源氏物語』作品全体における語法について、あるいは古注釈書等に示される解釈についてなど、『源氏物語』に関する先行研究書・論文など、多くの点において参考・比較・検討・考察が充分ではないことを断っておく。
- (4) 山岸徳平校注『源氏物語一』(岩波文庫、岩波書店、一九六五年六月)による。
- (5) 阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注・訳『源

氏物語①』（『新編日本古典文学全集』二〇、小学館、一九四三年三月）による。なお、阿部秋生・秋山慶・今井源衛校注・訳『源氏物語一』（『日本古典文学全集』一二、小学館、一九七〇年十一月）の頭注には「『いしにしへの人のよしあるにて』は『何ごとのたまひけれど』に続く。」と『新編日本古典文学全集』と同様に示している。

(6) 橋本治『窠変源氏物語一』（中央公論社、一九九一年五月初版、一九九一年六月再版）による。

(7) なお、『源氏物語評釈』と同じ訳注者による、玉上琢彌訳注『源氏物語』第一卷（角川文庫、角川書店、一九六四年五月）には、「心細げなり。」の主語について特に注はない。

(8) 高校生用の参考書・問題集等でも「なむ」の結びについては様々な解釈がある。例えば、増淵勝一『5週間実力アップ問題集 類出 源氏物語』（開拓社、一九九二年六月）では、「なむ」の結びについて、「母北の方なむ」に必ずる結びとなるべきものは、「古の人の由あるにて」の部分にあたり、ここで文が終止するなら『由ある（人）なる。』となつて、断定の助動詞『なり』の連体形『なる』で結ばれる。ところがこの場合は終止しないで、下につづくので、いわゆる結びの流れ（消去）という現象が生じていることになる。』とある。

【正誤表】

菅原利晃「小式部内侍『大江山』歌説話における教訓―『即詠』と『証』としての歌徳説話―」（札幌国語研究）第七号、二〇〇二年六月）

頁	段行	(誤)	(正)
42	上2	ひきやり逃げしと云々。	ヒキヤリ逃ト云々。
42	下8	読み出だして、	詠み出だして、
43	下10	此内侍秀三首ハ、	此内侍秀歌三首ハ、
44	下3	『袋草』 戯れ云ふ	『袋草』 戯テ云
45	上14	此内侍秀三首ハ、	此内侍秀歌三首ハ、
45	下7	口さがなき	口のさがなき
47	上19	証明をするという	証明をするという
47	下12	言うのであるさらに、	言うのである。さらに、
50	上7	小式部内侍が哥のよきは	小式部内侍か哥のよきは